

「安全専一」提唱者 小田川全之の経営から学ぶ

[足尾鋳業所 第10代所長]

NPO リスクセンス研究会 小田川雅朗

安全工学シンポジウム 2021

2021年7月1日

1. はじめに-目的-
2. 古河市兵衛の足尾銅山の概要と経営理念
3. 小田川全之の略歴
4. 第10代鋳業所長小田川の3つの施策
5. 小田川の鋳業所運営から学ぶ5つのポイント
6. 今日につづく《安全専一》

小田川所長



古河機械金属(株) 所蔵
1912年製造の現物
2020年4月 商標登録

1. はじめに -目的-

- 組織活動では**事故が起きるたびに、安全活動にトップの率先垂範が重要**と叫ばれ、**具体的にどうあるべきかが議論されるが、なかなか汎用的、具体的案までの議論が展開しない。**
- これは**経営の立場では、組織を維持発展させる為の基本施策である財政の健全性を推進する中で、経営層が「安全専一」活動の現状をどのように把握し、その施策をどのように遂行するのか汎用的な考え方がない点にあるのではと感じている。**

➡ 足尾鉍業所(現古河機械金属(株))で鉍毒問題、労働争議を経験した第10代所長小田川が1912年「安全専一」を掲げ全従業員の**安全安心の基盤を構築した3つの施策が今日にも有効であること**の紹介です。これは当時の所内報「鉍夫の友」30年間から読み解いたものである。

2. 古河市兵衛 足尾銅山の概要と経営理念

■ 概要

1832:京都の造酒屋の次男生。丁稚奉公を重ね
商人気質を身に付け**生糸貿易**で成功。

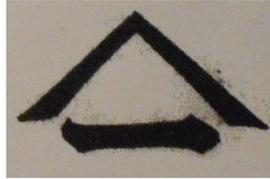
1875:時勢を読み**「鉱山業」**に専念。

(43)「山一」商標制定。

1877:廃坑の**足尾銅山**を買取り再抗。

1881、84 **2大鉱脈**を発見、産銅量が一気に増大。

1896～1903の**鉱毒問題**には、**鉱夫生活の場確保**
第一と操業を決意し私財・新技術を投入。道半ば
72歳で永眠(1903)。操業は次世代が継ぎ、後の
1907労働争議では虎之助社長が**「鉱夫一念」**で
対応。**1973:閉山**。開発技術は古河グループで継承。



■ 古河市兵衛の経営理念

「単に金儲のみでなく山奥の寒村を**「豊かな町にする」**
ことが私の道楽(志し)」この為に**「最新技術」「優秀な**
人材」を活用し**鉱山業**に専念。

NPOリスクセンス研究会

安全工学

3. 小田川全之の略歴

1861:旧幕臣小田川彦一長男・江戸小石川生。

1874:父沼津に赴任の為 沼津兵学校附属小学校卒

1877:**工部大学校**(現東京大学)で土木工学を専修。

この間外人教師の影響で受洗し**基督教徒**になる。

1883 (22歳):同校卒。**群馬県** (この時期**市兵衛**に知ら
れる)・**東京府御用係土木業務担当**。

1890・明23(29) :**足尾銅山**に入り土木工作課を担当

1904(43)から4年間、3代社長になる**古河虎之助**米国留
学時に**指南役**(語学堪能・工学士)で同行。

米国で流行し始めた**「安全第一運動」**に触れる。

1897:**鉱毒予防工事**、07:**労働争議**に対処

1911(50)～1915: 第10代所長就任、**「安全専一」**を
提唱、民間初の安全活動を実践。

1912:米国**鉱業技術者協会**・**終身会員**

1921:古河を退職、**1933: 6/29茅ヶ崎**で永眠 (72)

人柄:誠実・温厚・勤勉・実直・人の命を大切に。

➡ 発表者は小田川全之・古河市兵衛の曾孫

4. 第10代鉋山所長 小田川全之の3つの施策

◆ 小田川就任の1911年頃の環境

社長は第3代古河虎之助。翌1912年産銅量が初めて1万トンを超え、鉋夫も一万人を超えた。急速な近代化を進め最新機械の導入、独自開発した装置などで施設整備増強の時期。

◆ 繁栄の過程の2大事件に管理職として対処

1897: 第3回鉋毒予防工事: 対策工事部次長・社運をかけた難工事完工。

1907: 労働争議: 経営者視点で社長を支える。

◆ 経営者への【課題】

・ 外的: 労働災害防止の為「工場法」公布。

・ 内的: 機械設備増強、分業専門化等「新たな操業体制」。

➡ 「創業者の志」「無事故・無災害」での【鉋業所運営方策の構築】

◆ 小田川の鉱業所運営 ◆

この時期の経営者・従業員の一部となった**組織活動の最重要課題**は「**組織内の意思疎通の具体的構築**」であるとして独自の3つの施策を熟考し**段階的に実践した**。

- (1) 1912年：**安全標識板《安全専一》** 掲示 定期的清掃
- (2) 1913年：**所内報『鉱夫之友』** 創刊 新企画等慢性化防止
- (3) 1915年：**保安心得書「安全専一」** 発刊 作業方式変更等で改訂

➡ この施策は小田川が2大事件の経験を通して、経営者の意図・方針は通達書・口頭等**従来の一方的形式的方法**では、**第一線の鉱夫達へ十分に伝わらないことを痛感し**この【改善策】として【**目で見え具体的に理解できる**】【**鉱夫との意見交換を出来る**】ことを熟考した仕組であった。

4-1 安全標語「安全専一」の誕生(1912年) 小田川が提唱した「安全専一」の検討経緯

1917年4月「安全第一協会※」発足第一回総会の講演で
自らの思考過程を【二つの視点】で述べている。

(※会頭内田嘉吉:逓信省出身:米国視察で知った「*Safety First*」を
「安全第一」と称して、我国産業界での普及に尽力した。

【1】経営者の立場 (原文-一部略)

『米国では単にセーフチー・フォールストばかりでなく、
全てのことにフォールスト又はラージェストを付ける風ですが、

- 私も経費の節約をととなえ第一着に経済に行うことを、事業上
「経済専一」又は「節約専一」と申ししていた。

【2】 従業員・鉱夫の立場 (原文一部略)

『米国の友人からの情報で、当時「*Safety First*」という言葉が 徐々に使われるようになってきたことを知り、我が国では「**安全第一**」という言葉で申していたが、

そのころは兎角新しい言葉はわかりにくいので、私は「**安全主義**」、「**安全本位**」などと申していたが、日本語として「**安全第一**」というより「**安全専一**」の方がわりやすいので、足尾では「**安全専一**」と唱えた。

(出典「安全第一」安全第一協会発行 第一巻第2号)

⇒「*Safety First*」という言葉をもそのまま訳すと「**安全第一**」となるが、この【**2つの視点**】で熟考していたことに小田川の経営姿勢が感じられる。

4-2 (1) 第一の施策：安全標識板《安全専一》設置

スローガン《安全専一》の四文字が
「目で見えて具体的に理解できる方策」
1912(大正元)年

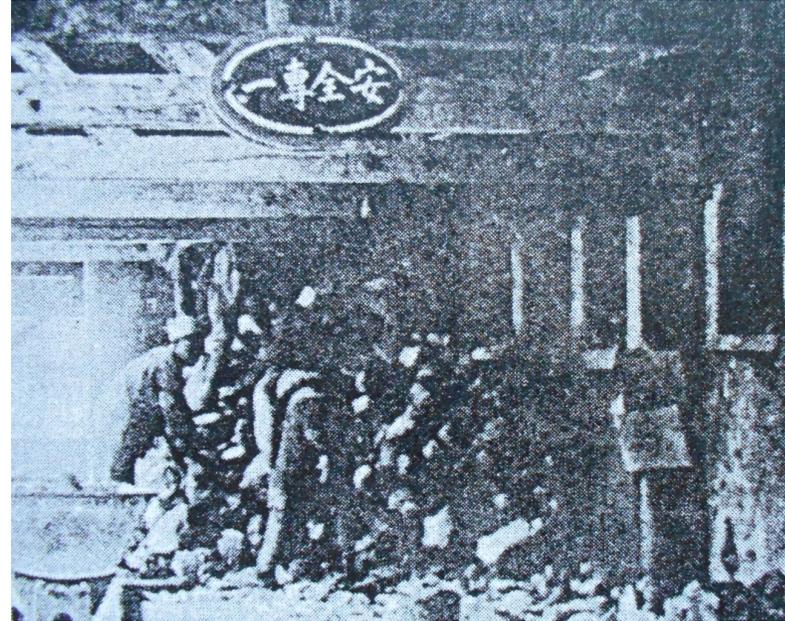
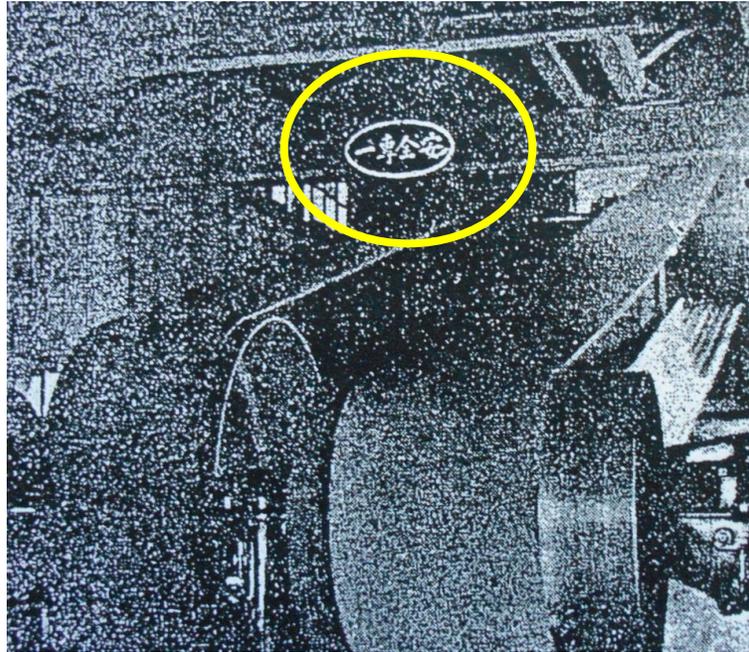
- 縦24cm・横45cm。
- 「**真っ赤な下地**」大きな「**白抜き四文字**」
「**白線枠**」付き・**暗闇でもはっきり見える**
- 坑道内外、全工場各所、休憩所など**多数設置**
- 耐久性のある**珐瑯挽き鋼板**・定期的清掃
➔ **我が国最初の「安全活動の証」**



通洞坑道 入口

FURUKAWA 140 YEARS
GUIDE BOOK より

4-2 (2) 第一の施策：安全標識板《安全専一》設置

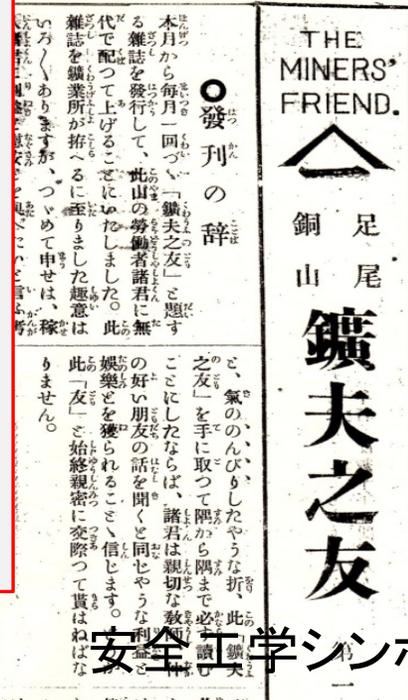


4-3 (1) 第二の施策：所内報「**鑛夫之友**」創刊(月刊)

最も必要とした方策 1913 (大2) 年 「最前線の鉱夫との意見交換ツール」

- ・いつでも、どこでも読める。
- ・後30年間334号迄続き、改題し今日の社報へ

●発刊の辞
小田川 (抜粋)
『この雑誌を拵える趣意は色々あるが、諸君に利益と慰安とを興えたいという考えに外ならぬのであります』どうかこの「友」と始終親密に交際してもらいたい。



- 「講話」 所長の訓話等、特に「人の道」多い
 - 「達告示」 会社の出来事・通達・人事
 - 「訓言」 精神・心の啓発。秀吉・家康等名言
 - 「伝記」 古河市兵衛/木村長七翁
 - 「雑録」 大火の状況/山神祭/海外の情報
 - 「文芸」 地元の伝説 お伽噺等
 - 「衛生」 応急処置・伝染病予防(以下毎号)
 - 「現業」 (技術紹介) 「私はベセマコンベア」
 - 「俳句」 (俳句欄は創刊号から続く)
- その後、新企画が続く「感想文・意見」「鉱山書:53ヶ条」「読者欄」「家庭欄(子育て支援・夫婦円満)」「戦線便り」「紀行」「修養欄」文芸欄(川柳・都々逸等)
- 「編者欄」→編者は経営者の代弁者?

鉱夫20名の問いへの回答、編者からの要望などあり。

「鉱夫之友」表紙の変遷

第 21号 大正 4年



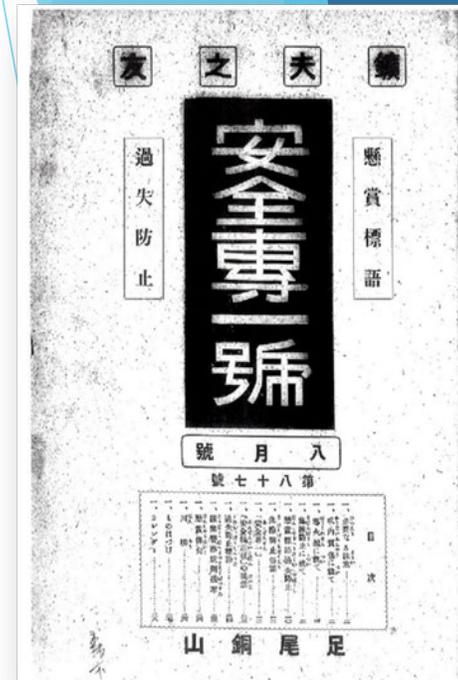
第 74号 大正 4年
表紙が付く



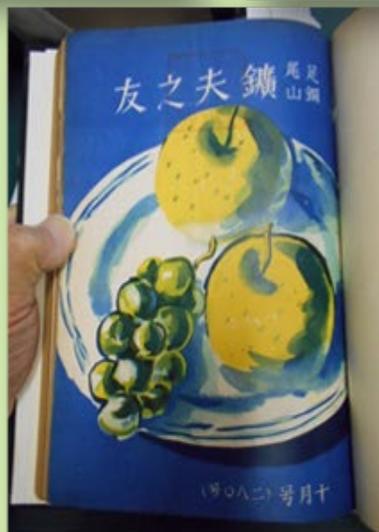
第 92号 大正 11年
表紙と目次が付く



第 202号 昭和 6年
厚紙表紙



第 260号 昭和 11年



第 280号 昭和 12年



第 334号 昭和 17年 最終号

第87号-特集号
安全専一號
大正10年8月

4-3(2) 小田川の施策には今日のCSR活動を先取りしていた 「鉱夫之友」30年間には、今日の【CSRの活動項目】のKWが多くが含まれていた。



- ・ KWは次の2つの構成に括れた【創業者・経営者の意図】
 - 【鉱夫・所員の意図】
 - ・ そして8つの活動項目にも相当
- ① 創業者理見 → **【社是・理念】**
 - ② 安全スローガン → **【基本伝達事項】**
 - ③ 安全活動の目的・成果 → **【見える化】**
 - ④ 教育・育成 → **【人材育成】**
 - ⑤ 内容充実・マン初化防止 → **【第三者の意見】**
 - ⑥ 鉱夫・家族との一体感 → **【健康】**
 - ⑦ 寒村の繁栄 → **【地元一体地域開発】**
 - ⑧ 鉱山関連技術開発 → **【環境負荷低減・技術開発】**

4-4 (1) 第三の施策 保安心得書『安全専一』発刊

スローガン《安全専一》の「具体策」 1915年1月(大4)
多種多様な労働者の技術水準を一定のレベル以上に維持する具体的施策

- ・ 操業体制は近代化、最新機械導入等施設整備の増強中。年間1万トンの産銅に約1万人の新人からベテランまでの労働者が従事。
➡職種別の最少限守るべき基本的事項が「誰でも一目でわかる・ポケット版」
- ・ 『鑛夫之友』で事前に米国事例等や本書の発刊を予告をして皆が理解した頃の第21号付録で全鉱夫に無償配布。 ➡「情報共有化」による安全意識の高揚策

【「鑛夫之友」第二十一号・小田川所長の言葉】

『皆様が負傷(けが)過失(あやまち)を避ける心得の箇条をしたためた「安全専一」と題する小冊子を配布するので、皆さんの御守りとして繰り返しよく読んで、かりそめにも我が身を守る注意を怠らぬよう、常々心がけて頂きたい』

4-4 (2) 保安心得書『安全専一』構成概要

「総体の心得」はしがき

-小田川の言葉(抜粋)-

『安全専一』とは

読んで字の如く、諸君が日々の仕事をする間に…自分の身を守り、併せて他人の身を守り、何人も負傷過失の無いようにする心得、即ち

安全ということを始終心掛けて習慣性(ならわし)としたい
という意味であります…。

-7頁2000文字-

約9cm × 15cmの手帳版
85頁 全体約300条

全体構成

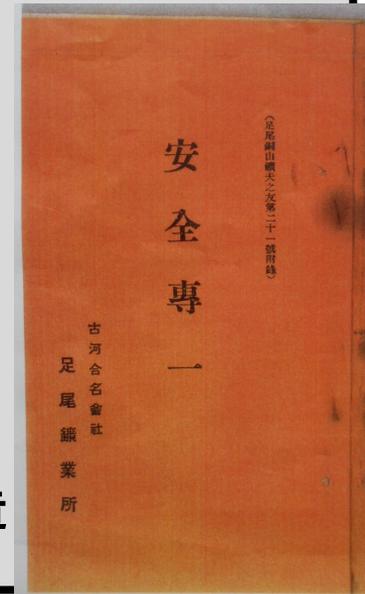
「はしがき」朱書

「注意」(共有知識)

総体の心得

目次

- ①採鑛
- ②製錬
- ③電気
- ④機械
- ⑤土木
- ⑥運搬
- ⑦林業
- ⑧導火製造



「総体の心得」要約

- ・酒気帯び仕事は禁止
- ・仕事服は適切な服装で
- ・脇見、居眠り、雑談禁止
- ・機械・器具の点検
- ・集団仕事場では相互注意
- ・どこでも「火の用心」
- ・他仕事の機械には触れるな
- ・異変察知時には係員に伝達
- ・休日前後の業務態度に注意
- ➔すなわち『常時、気を確かによく万事に心を配る事』

➔今日の安全ミーティングでもよく使われている言葉

5. 小田川全之の鉱業所運営から学ぶ5つのポイント

- ① 経営者は、組織の維持・発展の為の諸施策を推進する際、安全に関する施策を品質・環境などの施策と同じく重要と位置づけていることから、「安全第一」として優先するというよりは「安全専一」の姿勢で推進する。
- ② その際事故・事件の処理に携わった経験を有すれば、担当する組織の安全や環境等の状態が目標レベルに未達成な状態にあれば、問題点の所在に、容易に気が付き、必要な諸施策を主導で適切に策定し実施する。
- ③ 中間管理職は、Safety First活動の職務を担当する際、上司の理解が得られる場合は 目標とする職場の労働安全衛生環境の構築に力を発揮する。
- ④ 第一線の実務職層は(実務に専念する為)事故やケガなどは自らの不注意で起きるという意識は低い。
- ⑤ 安全に関する施策をCSR活動の中で上記①から④を織り込んで推進する。

➡この小田川の100年前の三職階層の行動は、今日の組織活動でも見られる事象である。

6. 今日につづく《安全専一》

6-1 古河機械金属(株)グループの労働安全衛生施策

●100年前の《安全専一》活動から築かれていたCSR活動の流れを汲みPDCAサイクルを回し、環境保全・労働安全衛生活動の推進の為「安全・安心・信頼」を掲げ無事故無災害の推進、環境影響を考慮し「より良い製品・サービスの提供を通じて社会に更なる貢献をすることを目指す」

●2020/4:《安全専一》標識・「四文字」商標登録

●基本的な安全に対する考え方・対策

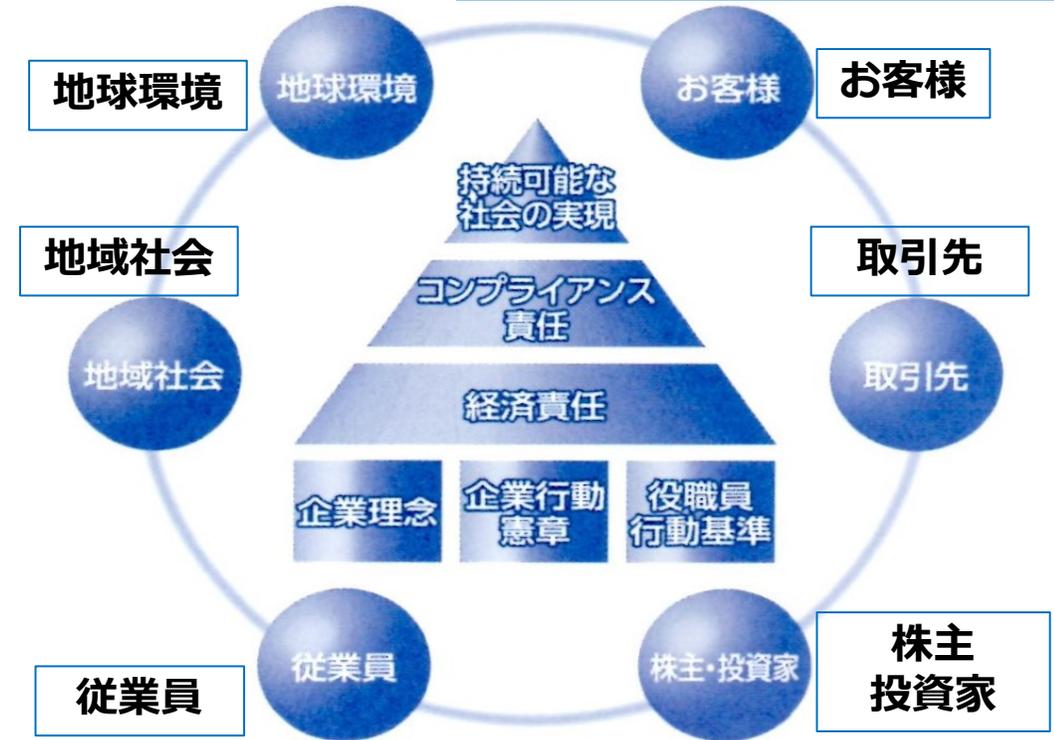
- (1) 安全に対する前提の再認識
- (2) **ゼロ災害の継続的な推進**
- (3) 安全を実現する為の積極的な意識保持

三職階層の活動の明確化

- ① **トップ**の経営姿勢⇒自ら安全活動の提唱
- ② **ライン**化の徹底⇒監理監督者の率先実践
- ③ **職場**での自主活動の活性化⇒KY・HH活動

■ CSRの概念図

古河機械金属(株)
CSR REPORT 2014より



6-2 株式会社ADEKAの安全活動

(株) ADEKAの源流は足尾鋳業所、1917年古河から独立し今日に至る。

● CSRLレポート2019年 (p30)

『 小田川の《安全専一》のDNAを連綿と受け継ぎ、
2003年にADEKA独自の概念として
労働・環境・品質・設備の安全活動を混然一体として有機的に
“4つの安全”と提唱し活動を始めた』 と記している。

【古河グループ】 古河機械金属(株) 古河電気工業(株) (株)ADEKA 横浜ゴム(株)
富士電機(株) 日本軽金属HD(株) 日本ゼオン(株) 朝日生命保険相互会社 (株)みずほF

➡ 109年前の小田川所長の志が
今日の新しい時代に、新たな形で脈々と流れ続けている

いつも心に「安全専一」

【謝辞】本研究では、古河機械金属(株)様、日光市足尾町在住の角田重明様より「鉱夫之友」「安全専一」に関する多くの原情報のご提供を戴きましたことに、感謝いたします。

【参考・引用文献】

- (1) 「鉱夫之友」：古河合名会社 足尾鑛業所 創刊号～334号(1913～1942)
- (2) 保安心得書「安全専一」：古河合名会社 足尾鑛業所 (1915)
- (3) 「安全第一」安全第一協会発行 第一巻第2号 【不二出版・復刻版2007年11月】
- (4) 古河鉱業株式会社 創業100年史 (1971年3月)
- (5) 小田川雅朗「足尾銅山・小田川全之『鉱夫之友』『安全専一』から学ぶ」化学経済 6月号 (2016) 化学工業日報社
- (6) 久能正之「今日の安全活動について」化学経済、6月号 (2016) 化学工業日報社
- (7) 小田川雅朗 安全工学シンポジウム2016 講演予稿集(OS7-2 p156-159)
- (8) 小田川他共著「産業安全活動 二つの源流」化学工業日報社 2016/9
- (9) 小田川雅朗 安全工学シンポジウム2017 講演予稿集(OS-11-3 p224-227)

ご清聴頂き 有難うございました
小田川雅朗

古河掛水倶楽部にて
安全標識板と発表者
2014年

